

メタファー 隠喩へのイニシエーション

田 畑 博 敏

(昭和60年5月29日受理)

1. はじめに

「それは言葉の彩にすぎない」、「たんなる比喻だ」などの言い廻しの中に、^{メタファー}隠喩をはじめとする比喻や、一般にレトリカルな言葉づかいに対する、大いなる軽視・蔑視が見てとれる。「たんなる比喻だ」と言われるとき、そこには、確かめうる事実ではなく言葉の上だけのこと、真面目のことでなくその場限りの遊びに属すること、確実なことではなく不確実で曖昧なごまかしのこと、等々が暗に含意されている。古代ギリシアの昔から、哲学者たちの多くは、比喻やレトリカルな言葉の使用を軽視し、むしろ迫害してきた。現代の言語哲学も、基本的には、言葉の“字義通りの”(literal)用法から出発する¹⁾(もちろん、言葉の“字義通りの”用法と、レトリカルな、ないし^{フィギュラティブ}“比喩的な”(figurative)用法との間に、明確な境界が存在するか否かは疑問であるが、ひとまずその区別を認めるとして)それは、彼らが、^{フィギュラティブ}“比喩的”用法を第二義的な用法としかみなさないからである。

たしかに、哲学者たちの態度にも一理はある。なにより比喩は曖昧であり、表現者の意図を推察することすら、困難な場合が多い。また、われわれの精神が言葉によっていかに枠づけられ、束縛されているかを痛感する人ならば、言葉に余分な負担をかけない、「事実そのもの」・「真理そのもの」にできるだけ近づくことを目指す言葉の使用を第一義的とみなすのは、当然である。しかしここには、言語に対するある先入見が伏在している。それは言語衣装観とでも称すべき言語観であり、それによると、言葉は裸の事実を忠実に写すべきものであり、あたかも透明な衣装のように「事実そのもの」が透かしてそのまま見える言葉ほど、良い言葉である。だが、われわれの言語はそのように簡単で便利に出来ているのだろうか？そのような言語のみが、はたして理想的な言語なのだろうか？

以下において、われわれは比喩の代表格である^{メタファー}隠喩⁽²⁾(以後「メタファー」と記す)を考察する。メタファーは、ある意味で最も不透明な言語使用の一つである。しかしメタファーは、われわれの現実の言語使用の本質的部分に、深く組込まれている。たんに言語のみに限られない。後に示すように、「こころ」の描写はメタファーとして理解するとき最もよく理解され、そしてそのようにしか

理解できないのではないかと思われる。また、われわれの日常的概念の多くが、メタファーの構造を有している。おそらく、言語をはじめとしてわれわれの思考や行動の多くが、メタファーの構造を有しており、メタファー抜きでは語り得ないだろう。従って、少なくとも言語への経験論的アプローチをとる限り、メタファーの問題は避けては通れないだろう。(本論は、そのような意味で、言語への経験論的アプローチのささやかな第一歩を踏み出そうとする試みである。「イニシエーション」とするゆえんである。)

2. メタファーの同定と構造

メタファーを問題にするとき最初に生じてくる問いは、いかにしてメタファーを同定するか、いかにして他の表現形態から区別するか、そもそもメタファーを同定するための必要にして十分な条件があるか、という問いである。この問いは、メタファーの構造、とくに意味論的構造とも深く結びついている。メタファーに比較してシミリ(直喩 simile)は、たいていの場合、半別の目安となる形式を備えている。“ものごとの様子を表現するために、「XはYのようだ」、「YそっくりのX」……というぐあいにたとえる形式を《直喩》と呼ぶ”⁽³⁾のが普通であるからだ。それに対して、メタファーはそういう形式をもたない。そこで多くの論者がメタファー同定の手がかりとして求めたのが、文中での構文論的および意味論的逸脱(deviance)である。ただし、構文論的逸脱の場合は、メタファーそのものからも逸脱して、理解不能に陥る可能性の方が高い。「男は狼だ」はメタファーでありうるが、「だ狼は男」は文でさえない。「丸い四角がワルツを踊っている」や「色のない緑が怒っている」は、ナンセンス詩のメタファーとして理解される可能性が残っていようが、「四角丸いのが踊ってるい」や「緑のいないが色怒っている」ではそれさえ不可能だろう。Johnsonも言うように、⁽⁴⁾構文論的逸脱はおそらくメタファー同定の必要条件でも十分条件でもない。少なくともメタファーであるためには、構文論的には文法的に適正な(well formed)文であるか、またはその一部でなければならないことは明らかである。すると求められるのは意味論的逸脱である。

たしかにわれわれは、^{メタフォリカル}隠喩的な表現に接するとき、ある種の精神的緊張・驚きを感じる。そのことによって、われわれがその表現をメタファーとして理解するよう導かれることも、しばしば生じる。それゆえ、そのような緊張や驚きを生じさせるものとしての特異な、逸脱した意味を、^{メタフォリカル}隠喩的な表現に求めることも自然ではある。その場合、しばしば説明の手段とされるのが、いわゆる選択制限規則の侵犯ということである⁽⁵⁾。例えば、表現“スミスは豚だ”(Smith is a pig)の^{メタフォリカル}隠喩的な性格は、“Smith”に賦与される[+two-legged]という^{マーカ-}標識と、“pig”に賦与される[+four-legged]という^{マーカ-}標識とが、不両立であることによって説明される⁽⁶⁾。つまり、字義通りに理解したときに生じる意味上の不適切さが、普通の表現の普通の意味に課せられるある規則性の違反、として説明され

るわけである。しかし、意味論的逸脱にしる、選択制限違反にしる、重視するあまり、それをメタファーであることの「必要条件」にまで格上げすることは、問題を残すやり方だと思われる。そもそも「普通の意味」なるものの範囲はきわめて曖昧である上、Loewenbergが指摘するように、⁽⁷⁾“どんな文にも、それが字義通りに理解される文脈は与えられうる”ものだからである。例えば、飼育している豚を、“Smith”という愛称で呼ぶときや、スミスが遺伝子操作によって豚に変えられてしまうSFの世界では、“Smith is a pig”はれっきとした字義通りの表現であり、意味論的逸脱や選択制限違反はないとみなすべきであろう。たとえ、“Smith is a pig”が^{メタフォリカル}隠喩的な意図で発言されたとしても、例えば、スミスが食べ物もなく深山をさ迷ったあげく、助けられて何日ぶりの食事をむさぼり喰う様はまさに豚としか言いようがないという状況では、「選択制限違反」という説明はいかにも弱く、また怪しげなものに思えてくる。

そうすると、意味論的逸脱による説明はある極端な原則に訴えるにいたる。その原則とは、メタファーには意味上の対立、あるいは論理的対立・論理的矛盾、ないしは意味のねじれ (twist)⁽⁸⁾ が伴っている、というものである。例えば、「男は狼だ」「スミスは豚だ」のようなメタファー（と解されうる）表現のもつ〈力〉は、人間の「男」と「狼」、人間「スミス」と「豚」とがおのおのある種の意味的対立、論理的対立にあることから得られている、とされる。この説明はある点では明快であり、有効でもある。元来、標準的なメタファーの説明では、「対立」より「類似」の方が重要とされる。xなる事物を表現する際の普通の表現手段であるXに替えて、通常yなる事物を表現する手段であるYによって表現するのがメタファーであるとすれば⁽⁹⁾ xをYと呼べるためには、xとyとが何らかの点で類似していなければならない。さもなければ、そもそもどういふ事柄を表現しようといふ意図して創られたメタファーなのかかわからない。つまり、メタファーのもつ〈意味〉が理解できない。それゆえ、メタファーは“類似性《にもとづき》、類似性《に依存している》”⁽¹⁰⁾といえる。しかし、逆に類似性があまりに明白な場合、メタファーは単なる比較と、もはや区別がつかなくなる。そして、容易に理解されるメタファーは、陳腐な決まり文句（常套句・慣用句）となって、いわゆる死んだメタファー (dead metaphor) に墮する。従って、「生きた」メタファー⁽¹¹⁾ 出来たてのほやほやのメタファーであればあるほど、類似性を発見することがむずかしいということになる。生きのよいメタファーに遭遇するとき、精神の緊張・驚きが生じるのはそういう理由による。そのとき、メタファーはある意味的対立・論理的矛盾を含むという説明は、説得力をもって来る。

ただし、「意味的対立」「論理的矛盾」ということを額面通りに受け取ることも危険である。額面通りに受け取ると、それならばメタファーは虚偽や嘘を含むものである、という結論に導かれかねないからである。⁽¹²⁾ 嘘とメタファーとは明らかに違う。メタファーには、人を欺こうとする意図はない。少なくともメタファーを創る側にはない。メタファーに欺かれたというのは不正確な言い方であって、メタファーとして理解せず、字義通りに受け取って嘘だと誤解したのである。「意味的

対立」「論理的矛盾」ということも、言葉の「意味」の一定の局面を指定してはじめていえることであるが、最初からそのようなことをメタファー表現に対して前提することはできない。それゆえこれらは、メタファー同定の、せいぜい暫定的な手がかりとなるにすぎず、必要条件にも十分条件にもなりえない。

かくして、メタファー同定の条件を与えることは絶望的に思えてくる。考えてみると、メタファーとしてはたらくその言語使用の現場での〈力〉こそ、メタファーの生命力であった。メタファー同定の条件やメタファーを創るための規則を与えるようとすることは、メタファーを殺すことにもつながりかねない。つとにアリストテレスが看取しているように、⁽¹³⁾メタファーの創作・理解はある程度才能の問題であるといえる。しかし、単に個人的能力・素質の問題に閉じ込めず、言語に普遍的な問題として解放するためには、またわれわれの思考のプロセスの基本的枠組みとしてメタファーを理解するためには、メタファー同定の「手がかり」を求めることは、決して無意味な作業ではない。メタファー同定の手がかりは、言語の自律的・文脈独立的側面によりはむしろ、語用論的・文脈依存的側面に求められるべきであろう。メタファーがメタファーとして同定されることは、メタファーとして使う意図のもとに創られ、メタファーとして理解されたとき、初めて可能となるからである。メタファーが創り出す独特な・新奇な意味も、使用の文脈を抜きにしては理解できないからである。

そこで次に、使用の文脈をも考慮に入れながら、メタファーに課せられ負わされる機能の面の考察に移ることにする。

3. メタファーの機能——その1——

メタファーの機能ないし作用について考えるとき、基本的な出発点となるのは M.Black の“Metaphor”という論文である。⁽¹⁴⁾“これは今や大西洋の西側では、この分野での古典となっている”⁽¹⁵⁾ものであるから、われわれもこの論文を足場にして考察を進めることにする。Black はこの論文で、従来のメタファーの機能論を「代入説」および「比較説」として総括し、これらの説を検討・批判するなかから、自らの新機軸「相互作用説」を打ち出すという戦略をとっている。そこでまず、「代入説」から見てみよう。

Black によれば、「代入説」(substitution view of metaphor) とは、“隠喩的な表現はある同値な字義通りの表現の代用物として使われる”とみなす見解のことである。⁽¹⁶⁾この「代入説」のポイントは、(1)メタファー表現には、字義通りの意味をもつある同値な表現が存在する、ということ的前提し、(2)その同値な表現が表現している意味を伝達するためにメタファーが使われる、と考えていることだと整理できよう。さて代入・代置された表現に直面する者は、いわば謎解きをしなくてはな

らない。事物 x を普通あらわす表現手段 X の代わりに Y (普通 Y を表現する) を用いる。従って、 $Y \rightarrow Y$ の結びつきを一旦御破算にして、 $Y \rightarrow x$ の結びつきを推理しなくてはならない。まさに謎解きである。ではなぜ代入するのか、なぜわざわざ謎を解かせるのか？これには二つのタイプの答えがある、と Black は言う。⁽¹⁷⁾ 第一のタイプの答えは、語彙のもつ事物・世界とのギャップを埋めるため、というものである。すなわち、表現されるべき事物は存在しているが表現手段がないとき、古い酒袋に新しい酒を入れるように、古い言葉に新しい意味を盛る、というわけである。例として Black が挙げているのは、数学者の言う角の“脚”(leg), 真つ赤な唇を表現する“サクランボの唇”(cherry lips), オレンジ「色」をあらわす“オレンジ”(orange), などのメタファーである。⁽¹⁸⁾ これらがメタファーと感じられないのは、使い慣れて新鮮味が薄れ、辞書にも登録されるようになって、ほとんど字義通りの意味と化したからである。しかしこれらが最初に上述の意味で使われ初めたときは、適切な字義通りの表現手段の欠如を補う苦肉の策・臨時の代用物であったはずである。そしてこのような言葉の意味の拡張的使用・豊富化は、言語にとってごく自然な現象である。新しい事物を表現するたびごとに新しい言葉を発明していたのでは、伝達に支障をきたすであろうし、第一、覚え込む暇もなく流通させるための時間も稼げないだろう。また事実、“山のふもと”(foot of mountain), “二刀流の使い手”, “曲がった空間”, などに見られるように、英語・日本語, 日常語・科学用語を問わず言語一般に普遍的に、この種のメタファーは現在している。いずれにせよ、このようなメタファーの代入・代置のはたらきによって、世界の新事物の発見が表現・語彙へと持ち込まれ、そのことによって語彙(の意味)が豊かになるといえる。

ところが、そうでない代入の場合もある。それが第二のタイプの答えである。例えば“リチャードはライオンだ”(Richard is a lion.) の意味は、字義通りの表現“リチャードは勇敢だ”(Richard is brave.) によって表現されるとする場合である。このとき、メタファー表現は字義通りの表現の単なる言い換えにすぎない、とみられる。字義通りの表現手段があるのだから、世界の新事物の発見が言語にもたらされ語彙が豊かになった、という訳ではない。ではなぜ、字義通りの表現を避けてわざわざメタファーを使ったか？理由づけはやや弱くなる。「勇敢」より「ライオン」の方が具体性があり、「眼前に彷彿とさせる⁽¹⁹⁾と弁明できるかもしれない。あるいは、読み手に軽いショックを与えるためと応じるかもしれない。しかし結局は、奇を衒うものか、せいぜい読み手を喜ばず装飾的なもの、としかみなされない。読み手の楽しみや気晴らしを目的とする言語的工夫がメタファーだということになると、真面目な哲学者がメタファーを真面目には取り上げなかったことも首肯される。(もっとも、言葉の遊びや装飾がなぜいけないのか？——これはまた一つの独立した問題であるが。)

いずれにしろ、「代入説」といえばこの第二のタイプの「代入」が即座に考えられる場合が多いせいか、「代入説」の評判はすこぶる悪い。⁽²⁰⁾ そこで次に提出されるのが、メタファーの「比較説」(comparison

view of metaphor) である。それによると、上述の例：“リチャードはライオンだ”の意味は，“リチャードはライオンに似ている” (Richard is like a lion.) の字義通りの意味によって与えられる。従って、「比較説」はメタファーを圧縮された直喩とみなす。少なくとも意味の上からはそう解される。すると、どういう点で、どういう観点から見て似ているのか、という疑問が生じるが、「比較説」はこれに直接には答えない。そこで「比較説」への反論は、その点を突くことになる。つまり、どの点で類似しているか曖昧だというわけである。しかし、類似性といっても、必ずしも「客観的」に与えられるとはかぎらない。人間「リチャード」と野獣の「ライオン」とでは、ある点では、例えば姿形の点では、全然似ていない。がある点では、例えば「勇敢さ」という点では、似ているかもしれない。類似性は証明されるものではない。どの観点から眺めているのかをはっきりさせないと、類似しているか否かは言えない。数学的相似もあれば、家族的類似(Wittgenstein)もある。文化的背景や個人の経験の差異にも左右されよう。従って、類似性は創られるものである。読み手も、創り手の意図している類似性を発見し、読みとらねばならない。「曖昧」なのではなく、類似性の創造的解釈が期待されているのである。ここにメタファー理解の創造性という側面が浮かび上がる。

伝統的にも「比較説」は評判がよい。おそらく、大多数のメタファーが類似性を基礎にして創られ、類似性によって説明され、理解されるからであろう。例えば、“男は狼だ”というメタファーは、「男」と「狼」とが「狡猾さ」の点で類似していると説明され、“時は金なり”というメタファーは、「時間」と「金」とが「貴重さ」の点で似ていると理解されるかもしれない。しかし、すべてのメタファーが類似性だけで説明できるとは思えない。例えば、“よく見ると、その向こうの杉林の前には、数知れぬ蜻蛉の群が流れてゐた。”(川端康成『雪国』)⁽²¹⁾という文中の「流れる」というメタファーは、類似性だけでは、理解も鑑賞もできないだろう。また、Searleも指摘するように⁽²²⁾類似性はメタファーの説明や理解の基礎とはなりえても、メタファーの意味の一部では必ずしもない。メタファーが類似性を基礎とし、類似性に依存しているとしても、常に類似性を「主張」しているとは必ずしも言えない。

そこで登場してくるのが、「相互作用説」である⁽²³⁾

4. メタファーの機能——その2——

メタファーの「相互作用説」(interaction view of metaphor) は、「代入」によってでも「類似性」によってでもなく、二つの意味の「相互作用」によって、メタファーが新しい意味を創造・生成する機能を、説明しようとする。例えば、“男は狼だ”というメタファーを考えてみよう。もちろんこのメタファーは、前節で見たように、「狡猾さ」などの類似性に基づく比較説によって説明されるかもしれない。しかし、それだけに尽きるのだろうか？別の角度から、もう少し含蓄のあるメタ

ファーとして理解できないだろうか？これに対する「相互作用説」の答えは、以下のようなものとなる。われわれが「男」あるいは「狼」という語に直面するとき、これらの語から読みとる意味は、必ずしも一通りではない。むしろ、ある中核的な部分を取り巻く多様な意味の層全体を、想起するのではあるまいか。中核的部分には、辞書に登録されているような意味、いわゆる表示の意味 (denotation) があるだろう。「男」の場合、「雄性」「成年で女性でない者」等の意味、「狼」の場合、「食肉目に属する犬科の獣」「群れをなす」等の意味である。そしてそれらだけでなく、「男」や「狼」に関するさまざまな慣習・経験・言い伝え・物語・伝説等、から連想され暗示される意味、いわゆる共示の意味 (connotation) が想起されるだろう。前者の中核の意味も含めて、そのような、意味の多様体を Black は、「連想常套句の体系」(system of associated commonplaces) と呼んだ。⁽²⁴⁾ 例えば、「男」の場合、《雄性、力強さ、勇敢、権威者、威厳、寛容、鷹揚、優しい、頼りがいがある、おっとり、ゆったり、家長、家父長、髭、長身、理知的、論理的、打算的、乱暴、荒々しい、大まか、粗雑、デリカシーを欠く、…》などが、それにあたる。「狼」の場合、《肉食、群れ、闘争、旅、流浪、狡猾、ずる賢い、獐猛、危険、人を騙す、表面は優しく裏では恐ろしい、二重人格、二重獣 (?) 格、牙、裂けた口、長くとがった耳、…》などが、それにあたる。これらはもちろん、個人により、また文化により、異なるであろう。狼と身近に暮らす文化においては、狼への親近感を示すような常套句が結びつくであろう。狼が悪者の代名詞になる文化もあれば、そうでない文化もあろう。また、多くの文化に共通してみられる、「狼」の連想常套句もあろう。動物生態学の専門家の立場からみるならば、それら常套句のなかには、あるいは間違っただけのものも含まれているかもしれない。しかしともかく、狼のもっている性質として信じられ、公認されている、常識の体系、連想常套句の体系というものがある。「男」についても同様である。そこで、“男は狼だ”というメタファーに直面するとき、二つの語、「男」「狼」の連想常套句の各体系が、作用を及ぼしあうことになる。その相互作用によって、常套句のうちどれかの句がとくに注目され、脚光を浴びるが、他の句は背景に押しやられ、霞んで見えなくなる、ということになるだろう。どの句が浮き出、どの句が沈むかは文脈によろうが、また文化の違いや個人の経験の差異も、それに甚大な影響を及ぼすであろう。一方の常套句の体系が他方のその「組織化」・編成替えをもたらし、⁽²⁵⁾ また「フィルター」の役目を果たす⁽²⁶⁾ さらに、一方の体系が、他方の体系による「写映」・「篩分け」(screening) によって、⁽²⁷⁾ 新しい概念体系として再生する。この相互作用は、一方を他方に還元することでも、代置することでもない。双方の (字義通りの) 意味システムは、なお共に、有効にはたらいっている。はたらきながらしかも、相互作用という触媒によって、新しい意味を結晶させてくるのである。“男は狼だ”の場合、「男」のもつ連想常套句の体系が「狼」のもつそれと相互作用を起こすことによって、いままで表面に現れていなかった「男」の共示の意味が「狼」のそれによって呼び覚まされ、新たに「男」の常套句の体系に組み込まれて編成替えを誘発させる。

以上のような「相互作用説」は、とりわけ、詩的な生きたメタファーの機能の説明に有効であるように思える。前節3での、川端康成『雪国』からの例：“…蜻蛉の群が流れてゐた。”（これは、「代入」や「類似性」だけでは説明しきれないメタファーの例であった）に、この説を適用してみよう。「蜻蛉の群」には、《昆虫、虫、薄い羽、飛ぶ、か細い、か弱い、…》のような連想常套句の体系があり、「流れる」には、《空気・水などの流体の物理現象、浮動、遊泳、小川、涙、血、…》のような連想常套句の体系であろう。これらが相互作用を起こすとどうなるか？「蜻蛉の群」と「流れる」という二語の結合に、われわれは最初、違和感を持つだろう。蜻蛉は飛ぶかもしれないが、果たして「流れる」か？「飛ぶ」と「流れる」とは、すぐには結びつきそうにない。しかし、蜻蛉が飛ぶといっても、飛行機のように堂々と、あるいは鷺のように精悍に、燕のように敏捷に、飛ぶわけではない。か細く、か弱い蜻蛉は、ふわふわと浮くように、もっと頼りなげに飛ぶだろう。その、ふわふわと空中を漂い、浮動する様は、空気の流れに身を任せて、ただ流されているようなもの、なのかもしれない。川や空気のような無生物の物理現象に普通は適用される「流れる」という語が、「蜻蛉」にいわば強引に結びつけられることによって、このような理解が、醸成され、呼び覚まされてくる。それによって、蜻蛉はただ「飛ぶ」ものだという形でしか、蜻蛉の「飛び方」に考え到らなかったわれわれの概念体系の、編成替えが要求される。蜻蛉は、頼りなげに、ふわふわと空気の流れに身を任せて、流れるように飛ぶ、つまり「流れる」のである。こうしてわれわれは、蜻蛉の「飛び方」についての、新しい概念体系を得る。逆に、「流れる」の方の体系も、川や空気のような無生物の無意図的な物理現象を表すのみならず、同時に、蜻蛉のような生物の動きにも拡張して適用されることが示されることによって、こちらも新しい概念体系へと編成し直されることになる。⁽²⁸⁾

こうして両方の意味体系が、各々の元の意味を残しながら同時に、いわば二重写しのように、新しい意味体系を現出させる——「相互作用説」によれば、メタファーはこのような機能を果たす。この説は、これまでの「代入説」「比較説」と比べると、はるかに洗練された、しかも包括的な説明となっている。というのも、すでに見たように、詩的な含蓄のある生きたメタファーのもつ新しい意味の創造の機能は、「代入説」や「比較説」ではうまく説明できない場合が多いが、「相互作用説」は、その詩性・含意性また意味の創造性を、相当巧みに説明するように思われるからである。

5. 意味および使用の文脈

メタファーにおいて新しい意味が創造・生成されるとき、元の意味のある変容が生じている。例えば、“男は狼だ”の「狼」はもはや字義通りの「狼」ではない。語「男」との相互作用によって、元の狼の意味をのこしながらも、ある変容を被っている。その変容した意味が、外ならぬ隠喩的意

味である。つまり、メタファーにおいては、字義通りの意味から変容した意味＝隠喩的意味が生成される、ということが一般的にいえる。

もちろん、このような説明の背後には、字義通りの意味 (literal meaning) と隠喩的意味 (metaphorical meaning) の区別が、前提としてある。ところが、この前提を Davidson は疑ってかかる。⁽²⁹⁾ Davidson によれば、この区別自体が虚構であって、隠喩的意味というものは存在しない。メタファーがもつ「意味」は、字義通りの意味だけであって、それ以外の意味ではない。メタファーは「意味」ではなく、もっぱら「使用」に関わる。新しい意味を生成するためではなく、気分を刷新させたり、励ましたり、感動させたりするために、メタファーは使われる。使用の文脈での実践的效果こそが、メタファーの領域であって、意味の変容に関わることはない。——

これはきわめてラディカルな批判ではある。しかし同時に、ある意味で振り出しに逆戻りしたものである。Davidson は終始、意味と使用を截然と分けている。彼にとっての「意味」は、あくまで真理条件につながる、客観的に提示できるものである。言葉の意味は、その言葉が語られる言語共同体の、任意の成員が理解しうるものでなければならない。従って、言葉の意味は、誰がいつどのようなときにその言葉を使っているか、という使用の文脈から独立したものである。メタファーも「意味」にではなく、どう使うか、どのような意図のもとにどのような効果を狙って使うか、ということに関わる。これは、メタファーが元来、レトリックの修辞部門の代表的技巧であった、という歴史的背景に直結する主張でもある。古典レトリックの主要な任務は、言葉を用いて人を説得することであった。そしてメタファーも、そのような説得をもって第一の任務とされることになる。

しかし、使用の文脈における効果と意味の変容とは、完全に切り離せるものだろうか？ 説得という効果を考えるときも、その効果を最大限に発揮させるためには、意味の変容は大きな要因、おそらくは最大の要因となるはずである。従って、意味の変容と使用の文脈とは、切り離して論じうるものではなく、むしろその緊密な連関を問題とすべきであろう。Davidson の批判が振り出しに逆戻りしている、というのはこのような意味においてである。

われわれとしては、メタファー使用の効果・効力の問題に進むまえに、意味の変容ということをもう少し掘り下げてみたい。確かに、意味の中心的部分に真理条件というものを考えることは、正当な接近法ではある。だがそうすると、「メタファーの真理条件は何か?」、「真のメタファーというものがあるのか?」という難問が招来されてくる。適切なメタファー、効力あるメタファーというものは考えやすいが、真なるメタファーというものがあるのか? そもそも、真理とメタファーとはどう結びつくのか? この難問に対して、Davidson の立場からは、比較的単純に答えられるように思われる。——例えば、「男は狼だ」というメタファーの場合、真・偽を Davidson のいう「意味」の中心部分と考えると、男が字義通り狼であるときかつそのときのみこのメタファーは真である、と言えよう。しかし、人間の男が字義通りに狼であるということは、現実にはありえないことであ

る。もし、このメタファーが上述の意味で真である世界を考えるならば、その世界は、現実世界以外の世界であろう。そのような世界は、ありそうにはないが空想可能ではあるから、一つの可能世界と呼べるだろう。この可能世界では、人間の男が、字義通り裂けた口をもち、牙をむきだし、長くとがった耳をもつ。男は「本当に」狼なのだ。つまり、この世界では字義通りに男は狼であって、隠喩的にそうなのではない。しかし、現実世界では“男は狼だ”は偽であるから、これはメタファーである。そこが肝心である。メタファーとして効力をもつのは、現実世界では偽であっても、真となる可能世界が空想できる命題である。否むしろ、現実世界では偽である方がメタファーとしての効果を高めるかもしれない。現実世界で生じていることを云々しても、説得・感動等のメタファーの実践的效果は余り期待できない。従って、メタファーであるためには、虚偽を含んでいなければならない……。——しかし、こうなると、(2節で述べた)虚偽とメタファーの単純な同一視というのはずれな主張までは、ほんの数歩である。

それでは、真・偽とメタファーとの関連はどのように考えるべきか？ここで、Fregeの Sinn と Bedeutung の区別が一つの手がかりになる。Frege は、世界の事物に直接結びつく、言葉の意味として Bedeutung (名が名指す対象や文のもつ真理値がこれにあたる) を考え、これを言語による Bedeutung 指示の仕方としての意味 = Sinn (これは広いイミで言語的なものである) から、区別した⁽³⁰⁾。メタファーが創造する新しい意味は、Bedeutung というよりむしろ Sinn に近い。「宵の明星」の言葉の意味 (Sinn) : 「夕暮れ時に西の空に明るく輝く星」を理解し、夕空の金星を指さしあれだと同定できる (つまり Bedeutung を知っている) 人で、「明けの明星」を具体的に同定したことがない (例えば朝早く起きるのが苦手で見える機会がなかった) 人がある、としよう。(だから、明けの明星が金星であることも知らない、としよう。) 日本語を解するかぎり、もちろん彼も「明けの明星」の言葉の意味 : 「明け方に東の空に明るく輝く星」は理解できる。そこで、「宵の明星と明けの明星は同一の星、金星である」という天文学上の事実を知らされたとき、彼は驚くだろう。「明けの明星」の言葉の意味、つまり 同定の条件 は知っているとしても、それがそのまま、同定さるべき対象の他のあらゆる性質をも知ったことにはならない。それゆえ、自分のよく知っている夕方輝くあの星が、明けの明星でもあると知らされても、にわかには信じがたい。しかし、天文学の知識を授けられ、これこれの季節にこれこれの位置を占める惑星が、天球の動きと共にどう変化するかを示されるならば、彼も納得するはずである。彼の最初の驚きは、メタファーに直面するときの驚きに似ている。“宵の明星は明けの明星である”が、彼にとってメタファーにならなかったのは、この文が真である根拠が即座に示されたからである。字義通りの「宵の明星」が、字義通りの「明けの明星」と同一であることが示されたからである。そうではなくて、もし彼が天文学の知識とはずっと無縁であり続けたとしたら、この同一性の主張は、彼にとってメタファーであったかもしれない。“男は狼だ”が大抵の人にとってメタファーであるのは、字義通りの「男」が字義通りの「狼」である条件・状

況を、示せないからである。きわめて奇妙なある可能世界では、男が字義通りに狼であろう。しかしそのような世界では、“男は狼だ”はもはやメタファーではないはずだ。「事実」をそのまま述べただけの文は、ほとんどメタファーではありえない。

従って、メタファーは Sinn の領域に、最後まで踏みとどまるものであろう。もちろん、メタファーに対しても真・偽を問題にすることはできる。重要なことは、メタファーであるかぎり、真・偽が未決定、宙ぶらりんのままである、ということである。字義通りに解するならば、偽である場合が多いかもしれないが、虚偽とメタファーとは異なる。真であると決定されたり、偽であると断言されたりしたとたん、メタファーはメタファーでなくなる。端的な真理、端的な虚偽となる。そういう形でメタファーは真・偽に関わるが、真・偽のどちらにも決定できない。その意味では、Davidson の言うように、メタファーは「夢」なのかもしれない⁽³¹⁾

メタファーであるかぎり真・偽の決定はできないものの、しかし、メタファーは真・偽の決定に寄与すること大である——丁度、Frege の Sinn がそうであったように。次節でそのことを、「方法としてのメタファー」という観点から見ておきたい。

6. 方法としてのメタファー

さて、メタファーはどのような形で真・偽の決定に寄与できるか、世界の事物の認識に貢献できるか？ここでは、Black に従って、モデルとメタファーの類似性を確認したうえで、「こころ」あるいは「わかるということ」の描写法としてのメタファーを考察してみたい。

[1] モデルとメタファー

Black は“Models and Archetypes”という論文で、ある種のモデルとメタファーが、構造と機能の点できわめてよく似ていることを指摘している⁽³²⁾ Black の分析によると、一口にモデルと言われるものにも、さまざまなタイプがある。

- ①縮尺モデル (scale models)⁽³³⁾——石器時代の住居モデル、船や飛行機のミニチュアなどこれに当たる。こういうモデルは実物の模倣・似像 (アイコン) ないし等縮約の小型版として、実物が現在入手不可能な場合などに使われるものであって、モデルとしては最も素朴なものである。
- ②類比モデル (analogue models)⁽³⁴⁾——実物の構造・関係のみを写すモデルであって、幾何学的な大きさは問題にされない。数学での同型写像 (isomorphism)、つまり構造を保存する一対一対応 (全単射同型写像) があればよい。数学基礎論や論理学でのモデル理論・形式的意味論のモデルがその例になる。
- ③応用科学等の数学モデル (mathematical models)⁽³⁵⁾——例えば、経済現象を解明するための数学的装置。複雑な現象を単純で理想的なものに分割・還元し、その単純な現象を厳密に数学的な方

程式で定式化して、そこから元の複雑な現象を類推しようとするもの。このモデルの欠点は、モデルを造ったからといって、それが即、元の現象の「説明」にはならないことである。

④理論モデル (theoretical models)⁽³⁶⁾——Maxwell の電磁場のモデル、あるいはかつての光の媒体モデルとしてのエーテルのような、モデルを造ることそのこと自体が、そのまま実在世界のあり方・描写の仕方となるようなモデル。

——この理論モデルのはたらきは、メタファーのそれにきわめて近い。メタファーも理論モデルも共に発見のための仮構であり、それらは、自らが描写する（電磁場のような）理論的対象があたかも存在しているかのように語る。事実、Maxwell 以後の電磁場は、物理学者にとってはほとんど完全に実在性 (reality) を獲得している。相対論の「曲がった空間」も、素人にとってはまだメタファーくさいが、ブラック・ホール物理ではれっきとした市民権を得ている。しかし、これらの理論モデルも、初めて提唱されたときは、大多数の物理学者たちにとっては、ほとんどメタファーであったろう。メタファーとしての理論モデルが有効であるためには、そのモデルのもつ含み (implication) ないし論理的帰結 (logical consequences) を十分にコントロールでき、展開できるものでなければならない。類比モデルもこの点では理論モデルと同じく、発見的 (heuristic) 機能と独自の展開可能性を備えることによって、有効なモデルになりうる。そして、有効なモデルが「説明力」をも持ったものであるためには、モデルと実物・実在の間に同型写像＝構造を保存する一対一の対応がなくてはならない。

従って、メタファーが有効なモデルとしての資格をもつメタファーであるためには、メタファーとしての独自の発展性・展開可能性を備えていなければならない⁽³⁷⁾。そのことによって、今まで知られていなかった、新しい推論や洞察が得られることになるからである。

因みに、Black が挙げる最後のモデルは次のものである。

⑤元型 (archetype)⁽³⁸⁾——これは、T. Kuhn のパラダイムに近いもので、隠された、または暗黙の同意のもとに前提されたメタファーである。これは、いろいろな学問・慣習の「究極的言及」・「究極的前提」であって⁽³⁹⁾、通常、仮説としてすら意識されず、全くの前提・思考の枠組みとなっているメタファーである。しかしこれも、仮説としての性格を免れない以上、絶対的なものではありえず、ある時代・あるグループに特徴的なものの見方・思考の枠組みである。その意味で、一種の神話でありメタファーである。ただ、われわれの思考の奥深くにきわめて堅固に安定して居座り続けているモデルであるから、われわれの思考のあり方を決定してしまうほどの力をもつ、決して軽視できないメタファーである。(次節で改めて考察する。)

——いずれにせよメタファーは、発見の便法であり、描写の仕方であり、思考の枠組みである。つまりは思考のモデルである。しかもそのモデルは、単に暫定的な・その場しのぎの説明手段であるにとどまらず、ゆくゆくは現実の存在性を獲得することを、期待し暗示するものである。言い換え

ると、モデルとしてのメタファーは、《存在の含意》を伴うということである。このことを具体的に示す事例として、「ころ」あるいは「わかるということ」の描写法としてのメタファーを、考えてみたい。

[2] 「ころ」あるいは「わかるということ」の描写法としてのメタファー

われわれ人間は、さまざまな環境——森林・山・川・湖・海・動物・植物等の自然環境、親・子・兄弟・配偶者・隣人・同僚・友人等の人的環境、机・椅子・本・万年筆・ワープロ・パソコン・衣服・自動車・住居等の道具的環境——に取り囲まれて、それらと調和・共存し、いわば分かり合い理解し合って生活している。とくに、「ころ」を持つ他人と「わかり合い」「理解し合う」ことは、人間の最も人間らしい営みの一つである。しかし、そもそも他人が「ころ」を持っていることを、どのようにして確かめうるのか？他人も自分と同じように目の前のコップの色や形を見、同じように腹をこわしたら腹痛を感じるのか、それをどうやって知ることができるのか？そんなことは当たり前だ、と言われるかもしれない。生命のない機械ならいざしらず、生身の人間は誰でも「ころ」を持っている、だから他人も同じように見るし、同じように腹痛を感じるのだ、と。だが、事はそれほど簡単ではない。当たり前だと思われることでも、開き直ってその根拠を尋ねられると、簡単には答えられない問いというものがある。これも、そのような難問の一つ——哲学的には、いわゆる他我認識の問題、他人のころをどのようにして知ることができるかの問題——である。

虫歯がひどくなり、痛みだすとき、これは端的に痛い。つまり自分の痛みは端的に自分の痛みであって、自分にわかる痛みである。だから、自分の「ころ」は、自分にはよく「わかる」。しかしこれとて、それほど明瞭かどうか疑わしい。終始私を騙し続けるデカルトのデーモンや、無意識の欲求・意識下の自我（フロイト）を持ち出さなくとも、ギリシアの昔から「自分自身を知る」ことの難しさを、われわれは痛感していたはずである。自分自身の「ころ」にしてそのような体たらくであれば、他人の「ころ」を知ることはなおさら難しいであろう。仮に、自分の痛みは自分が一番よく知っていることを認めたとしても、他人の痛みはどのようにして知りうるか？他人の痛みは、自分には絶対体験できない。これは、事実的ではなく論理的に、できない。他人の痛みを自ら痛むことは、言葉の定義上できない、従って、論理的にできない。しかし、顔をしかめ、口を歪め、痛そうにおなかを押さえている子供がいたら、その子は腹痛を起こしていると、われわれは察するだろう。もちろんそれは、単なる推測にすぎない、とも言える。子供は、痛そうなふりをしていただけかもしれない。学校に行くのが嫌で、仮病を使っているのかもしれない。しかしわれわれは、他人である子供にも自分と同じような「ころ」があって、悪いものを食べたときや食べ過ぎたときは自分と同じように腹痛を起こすだろうと推察して、対処するのが普通である。つまり、他人の痛みを自分の痛みの比喩として、メタファーとして、理解しているのが実状である。

いや、それは学問的な語り方ではない、と実証的生理学者は言うだろう。「痛い」というところの状態は、脳の中でかくかくの化学的・電気的变化が生じているという語り方をすべきである、あるいは、そのような生理学的変化に平行するある状態である、という語り方でせいぜいとどめるべきである、と。メタファーで語ることは、「ところ」や「痛み」を不当に実体化することにつながるということを、彼は懸念するわけである。しかし、このような生理学言語で言い直してみても、それは痛いという端的な事柄とは全然別物であって、何の説明にもならないし、何の理解にも導かないだろう。行動主義者は、こう言うかもしれない。痛いという「ところ」の状態は、その身体的な現れ——身振りや顔の表情、痛そうに顔をしかめたり、口を歪めたりするしぐさ——に対応している。だから、そういう観察可能な行動の束として、「痛み」を定義できる。なぜなら、そういう身振り・振る舞いをするとき、「ところ」は大抵の場合、「痛い」という状態にあるからだ。そう言うかもしれない。「ところ」の描写を、そのような観察可能な行動言語に還元して行くことには、しかし、なにか一つ重要なことが欠落している感じを抱かせる。“本当に痛い”ということが、それによって伝えられ、理解され、「わかる」ことになるのか、そのことが心もとない、もどかしいという感じが残るのである。あるいは、もっと洗練された行動主義者は、こう言うかもしれない。「痛み」を表現する身振りや表情は、「痛み」の表現手段、「痛み」の身体言語 (body language) であると同時に、「痛み」の一部でもある。“うーん、痛い”と言っておなかを押さえるしぐさ、“あちっ!”と言って茶わん蒸しのふたから手を離す動作、そういう身体言語自体が「痛み」の一部分である、「痛み」の構成要素である、と言うかもしれない。なぜなら、“痛い”という言葉を発して腹を押さえたり、手をひっこめたりするしぐさは、生成的に「痛み」の体験と切り離せないものであって、「痛み」の一部になりきっている。もちろん、“auch”ではなく“痛い”とか“あちっ”という日本語を「痛み」と共に発することや、ひっこめた手を鼻の頭ではなく耳たぶにもっていき動作をすることは、後天的に教わり見習って以来、身についたものである。つまり、「痛み」の表現としての言葉や動作は、「痛み」に先天的に結びついているのではなく、文化や慣習や個人の体験の差異に相対的である。しかし、一旦個人がある文化の中に生まれ落ちるや、その文化内で教わる「痛み」の言葉や動作は「痛み」と不可分に結びつけており、その結びつき方はほとんど先天的・絶対的と言えるほど強い。その意味で、「痛み」の言葉や動作は、「痛み」の一部だと言ってよい。——この洗練された行動主義者の言い方は、ある行動を「ところ」の状態の《表現》ではなく《一部分》であるとした点で、一歩前進したものである。しかし、なぜ他人の「痛み」を「わかって」とするのか、なぜ理解し、同情し、取りのぞいてやろうと努力するのか、という肝心のことが忘れられている。この「なぜ」の問い、動機にかんする問いは、「ところ」や他人のところが「わかるということ」の理解にとって、必須の事柄である。物理現象の説明にとっては、それらの問いは不要であり、不毛であるかもしれない。しかし人間の「ところ」に関わる事柄においては、また人間が他の人間を「わかるというこ

と」においては、これらの問いは避けては通れないだろう。子供が“痛い！”と叫ぶとき、子供は自分の「痛み」を記述したり表現したりしているのではなく、ここに有る「痛み」をなんとかしてくれ、取りのぞいてくれと訴えているのである。少なくとも、そのことがその叫びに含意されている。その子の「痛み」が「わかるということ」は、その含意を了解して、しかるべき処置をとることである。その含意の了解の出発点は、その叫びに、「痛み」の《存在の含意》を読み取ることである。「痛み」が本当にそこに在る、と思うことである。だが、洗練された行動主義者の言い方に、「痛み」の存在が十全に含意されているとは感じられない。

他人の「痛み」が「わかり」、他人の「痛み」に同情するということは、他人の「痛み」の《存在の含意》を認め、もし自分がその人であればさぞ痛いだろうと、想像することによって初めて可能である。もとより、自分は他人とは違う。他人になることはできない。自分AにはAの痛み「痛みA」が有り、他人BにはBの痛み「痛みB」が有る。自分Aにしかわからない「痛みA」を表す言葉「痛い」は、実は「痛いA」なのであって、他人Bの痛みをも便利に中立にあらわすかのような言葉「痛い」なのではない。Bが“痛い！”と叫ぶときも、Bに専有されている「痛みB」を専ら表す「痛いB」を使っている、つまり“痛いB！”と叫んでいるのだ。Bの、“痛いB”という叫びを聞いて、自分Aがわがことのように同情し、自分がBであればさぞ痛い（実際は「痛いA」）だろうと想像することは、あたかも「痛いB」という言葉が「痛みA」を表しているかのようにみなすことである。本来、事物Yを表すYという言葉が、あたかもxを表しているかのように考えることである。つまり、「痛いB」という言葉にメタファーの構造を読み込むこと、「痛いB」をメタファーとみなすことである。これは、一種の感情移入である。自分Aからは、Bの痛み「痛みB」には近づけない。「痛みB」を所有することはできない、論理的にできない。だから、Bの「痛いB」という言葉を聞いて、「痛みA」が自分Aに有るかのように想像することは、「痛みB」を自分Aに持ち込んだと想像することである。それは、あくまで想像である。自分が有しない「痛み」が、存在するかのように想像するのである。だから、他人の「痛み」の言葉をメタファーとみなすことは、感情移入である。だが、他人の「痛み」を「わかる」には、感情移入によるしかないのではないか。他人の「痛み」を語るには、メタファーによるしかないのではないか。他人の「こころ」はわからない、他人の「こころ」の状態を知ることにはできない。「こころ」の状態は、検証可能な事実ではないからだ。他人の「こころ」が「わかる」ことは、だから、メタファーとして「わかる」というわかり方以外にはない。他人の「こころ」が「わかる」ときのわかり方は、メタファーの構造をとっている。従って、そのわかり方の描写法もメタファーとなる。

身近な他人からさらに拡げて、外国人や文化を異にする人々を理解しようとするとき（異文化理解・異文化間コミュニケーション）、あるいは環境としての動植物や自然を理解しようとするとき（環境世界とのコミュニケーション）、そこにはたらく感情移入や擬人化といったわかり方も、メタファ

一の構造をもつと見ることができる。一般に、広く（人間のみならず動植物や環境も含めて）他者を理解する・「わかる」構造の中に、メタファーの構造が組込まれているのではないと思われる。（ここで、この主題を全面的に展開さす余裕は現在ない。示唆にとどめる。）

7. 概念枠としてのメタファー

われわれは日常生活において、意識すると否とに拘らず、さまざまな概念枠・概念体系に基づいて思考し、行動している。例えば、「時間は貴重なものである」という「時間」に関する概念枠がある。約束の時刻をきちんと守ることや時間きっかりに仕事を始め・終わることが、社会生活上の当然のルールとされ、また時間によって仕事の量を計り（e.g.大学の講義の単位時間制）仕事の価値を判定する（e.g.時間給）ことが行われるのは、この概念枠に準拠して時間が捉えられているからである。また、「議論に勝つ」、「議論に負ける」、「論陣を張る」、「論点を攻撃する」、「論拠を失う」、「立場を防御する」、「議論の戦略を練る」、「議論を粉砕する」、「論敵との論戦」等々の言い方は、「議論は戦いである」という、「議論」についての概念枠が存在することを示唆している。しかし注意深く観察してみると、これらの概念枠・概念体系が^{メタフォリカル}隠喩的なもの、メタファーに根ざすものであることに気づく。時間が「本性上」貴重なものであるかどうか、これには疑問が残る。貴重なものでも重要なものでもないものとして「時間」を考えることができるし、そのような文化を生活している人々もいる。しかし、われわれの現在の生活様式、生活習慣——とくに、西欧近代文化の直接の影響下にある都市の生活習慣——、もっと広くわれわれの現在の文化（とくに都市文化）において、時間は貴金属や有限の資源同様、「貴重なもの」とされ、数量化され、価値計測がなされる。そのような概念枠に基づいて、われわれは時間に対処する。従って、「時間」の概念を理解するとき、われわれは、貴金属や有限の資源に本来備わっている（とみなされる）概念＝「貴重なもの」を、借用して用いることになる。これは、一種のメタファーである。「議論は戦いである」という「議論」の概念枠についても、同様なことが言える。「議論」を「平和的」なもの、協調と和のなかで行われるものとする生活様式は、十分想像できるし、実際そういう文化を発達させている人々も多いであろう。しかしわれわれの現在の生活習慣では、「議論は戦いである」というメタファーを主流の概念枠として、「議論」を考えている。「戦い」の概念を借りて「議論」の概念を理解しているわけであるから、「議論は戦いである」もメタファーである。LakoffとJohnsonは、概念枠・概念体系としてのメタファーに注目して、興味深い指摘を行っている⁽⁴⁰⁾われわれも彼らの着眼点を参考にしながら、概念枠としてのメタファーを瞥見してみたい。

LakoffとJohnsonによれば、物理(身体)的、文化的、知的という大まかに三つの概念の類型を考察することができるが、これらが相互に概念の交差・貸し借りを行って、しかも全体として一

つの体系を構成しているという⁽⁴⁾。そこでとくに、物理的および方位づけの (orientational) 概念が、文化的概念をどう枠づけ、構造づけているか、を見てみる。方位づけのメタファーは、上・下、前・後、内・外、接・離、深層・表層、中心・周縁 (辺) といった空間的方位によって、善・悪、正・邪、等の価値・文化的概念や、喜び・悲しみ等の個人的感情——これらにはもともと空間的方位はないが——を、枠づけ、構造づけている。

《上・下の概念枠》(以下の例は Lakoff & Johnson [1980a] p.462 ff. による。)

(1) 幸福は上、悲しみは下。——“意気軒昂に感じる” (feel up) や“上機嫌である” (be in high spirits), “気分が落ち込む” (feel down), や“意気消沈している” (be depressed) という概念において、幸福が上向きであり、不幸や悲しみが下向きである、という方位づけがなされている。これは、直立の上向きの姿勢 (=われわれの物理身体的方位) が、幸福で積極的な感情に伴うものであり、下向きの姿勢が、不幸で消極的な感情に伴うものであることに基づく。

(2) 意識は上、無意識は下。——“起きろ” (Get up), “目覚めよ” (Wake up), “私はもうすでに起きています” (I'm up already), “彼は眠りに落ちた” (He fell asleep), “彼は催眠状態にある” (He's under hypnosis), “彼は昏睡状態に沈んだ” (He sank down into a coma)。人間や多くの動物は、目覚めているときは直立しており、眠るときは横たわる、ということに基づく方位づけである。

(3) 健康・生命は上、病気・死は下。——“健康の頂点にいる” (be at the peak of health), “最も好調である” (be in top shape), “病気になる” (fall ill), “彼の健康は傾きつつある” (His health is declining), “ばったり倒れて息絶える” (drop dead)。健康であればわれわれは、直立し上向きでいるが、重い病気になると横たわる、ということに基づく方位づけである。

(4) 支配し強制力を持つことは上、支配され強制されることは下。——“人を監督する” (have control over one), “権力の絶頂にいる” (be at the height of power), “彼の権限は増大した” (His power rose), “人の監督下にある” (be under one's control), “彼は権力の座から落ちた” (He fell from power)。物理的力は物理的大きさに比例し、力による勝利者は頂点にいるのが常である。

(5) 高い地位は上、低い地位は下。——“彼は高い地位を得ている” (He has a high position), “彼は生涯の頂点にいる” (He's at the peak of his career), “彼が昇進する見込みはほとんどない” (He has little upward mobility), “彼は低い地位にいる” (He has a low position)。高い地位ほど社会的階層としては上とされ、社会的力も大きい、つまり上向きとみなされる。

(6) 善は上、悪は下。——“事情は好転しつつある” (Things are looking up), “このごろ生活の質は高くなっている” (The quality of life is high these days), “ずっと最低の状況である” (Things are at an all-time low)。個人的幸福、(生命・財産・健康等の) 善きものどもは上、その反対物は下とみなされる。

(7) 有徳は上、邪悪は下。——“高潔な人である”(be high-minded), “彼女は高い道徳的規範を持っている”(She has high standards), “彼女は立派な市民である”(She is an upstanding citizen), “そこまで成り下がりたくはない”(I wouldn't stoop to that), “私はそれに似つかわしくないだろう”(That would be beneath me), “彼は墮落の淵に落ち込んだ”(He fell into the abyss of depravity)。有徳が社会の規範に合致し、社会の福利を増加せしめるように行動することだとすると、社会規範に従うことや社会的福利の増大は善であるから、それらは上向きに方位づけられる。なぜなら、善は上向きだったから。

(8) 理性的なものは上、感情的なものは下。——“議論は感情的なレベルまで落ちたが、私がそれを理性的なところまで戻した”(Discussion fell to the emotional level, but I raised it back to the rational plane), “彼は自分の感情を抑えることができなかった”(He couldn't rise above his emotions)。人間が自らを他の動物より優れ、他の動物を支配できるとみなす(傲慢?, 思い上がり?)のは、人間だけが理性的でありうると考えるからだだとすると、理性的であることは上向きである。なぜなら、支配することは上向きだったから。

以上、英語の表現のなかに見られる、「上・下」の方位づけメタファーを例示した。次に、諺・格言・俗言・俗信等に見られる「内・外」の方位づけメタファーに注目してみる。諺や俗信を取り上げるのは、それらが永年に亘って、日常生活での概念類型のいわば沈殿物となって、われわれの概念を粹づけてきているからである。

《内・外の概念枠》(諺・俗言の例は、『ことわざ大辞典』(小学館 1982)による。)

(1) 同類・仲間は内、異物・敵は外。——“身内”, “垢も身の内”, “蝙蝠も鳥の内”, “残り物も数の内”, “子供でも数の内”, “危ないことは怪我の内”, “早飯も芸の内”, “鯨立ちも芸の内”, “田作りも魚の内”, “自慢・高慢馬鹿の内”, “正直も馬鹿の内”, “鬼は外”, “鬼は外, 福は内”, “外敵”, “外界”, “外様大名”, “仲間はずれ”, “外れ者”。同類のものや仲間は身近な内側にあり, 異質のものや敵は遠い外に在ることに基づく方位づけである。

(2) ところ・内面・魂は内, 身体・外形・姿は外。——“思い内にあれば色外に現わる”, “情け内に籠もり言葉外に現わる”, “心内にあれば色外に現わる”, “心内に動けば詞外に現わる”, “内の習いは外に出る”, “内の病は膏薬で治らぬ”, “内裸でも外錦”。目にみえないところは身体の内側にあり, 目に見える姿形は外, という方位づけ。

(3) 安らぎ・安全・安心は内, 戦いの場・危険は外。——“内ほど良い所はない”, “東西家にまさるものなし”, (East or west, home is best), “我が家は城廓”(A man's home is his castle), “どんなにみすばらしくあろうとも我が家にまさる所なし”(Home is home be it never so homely), “家を出ずれば七人の敵あり”, “鬨を跨げば七人の敵がいる”, “男子家を出ずれば七人の敵あり”,

“男が門口を出ると七人の敵がある”。身体の内部にあるところが休まるのは、物理的にも家の内側においてである。

(4) 有望は内、失望・失敗・期限切れは外。——“矯めるなら若木のうち” (Best to bend while it is a twig), “鉄は熱い内に打て” (Strike while the iron is hot), “良いうちから養生”, “若い内は二度とない”, “後の祭り”, “当てが外れる”, “当ての皮が外れる”。将来性のある, 若い有望な時期は, ある時間的限界の内部であって, その外側では希望は失われる。

(5) 実質は内, 表面は外。——“手の内を見せない”, “腹の中”, “外面”。本物の部分は内部に隠されており, そうでない部分が外に現われる。

(6) 合致は内, 異端・極端・逸脱は外。——“的中”, “命中”, “南中”, “桁外れ”, “桁が外れる”, “道に外れる”, “外れっ子は火事より怖い”, “ピントが外れる”, “下手の的は外れる”。合致や調和はまとまりのある内部を構成するため求心的に内に向かうが, 逸脱するものは物理的にも遠心的に外に向かう。

「上・下」および「内・外」の方位づけメタファーに共通なことは, それぞれがある整合的な, 一貫性のある体系を形づくっているということである。「上」と「内」はなにか積極的な価値の高い(とみなされる)ものの方位であり, 「下」と「外」とはそれらとは逆のものの方位である。従って, 例えば, “私の精神は直立した= My spirits rose”が, “私は一層悲しくなった”を意味することは, この方位づけメタファーの体系からは排除される⁽⁴²⁾さもなければ, 方位の体系性が損なわれるからである。体系の整合性, 首尾一貫性が失われるからである。しかし注意すべきことは, この体系が方位づけの枠すべてをおおいつくすわけでもなく, 絶対的なものでもないということである。この体系が機能するのはある特定の文化においてであり, 同じ文化内でも絶対・唯一の体系とは言えない。特に, 諺・俗言として沈殿している概念では, 方位づけの体系が, 同一文化内で競合しあうこともしばしばある。例えば, “井の内の蛙大海を知らず”, “内広がり外の外すばり”, “内弁慶の外菜虫”, “内の米の飯より隣の麦飯”, “籠の内の鳥”, “驕る平家は内より崩る”等の一連の諺は, 上述の「内・外」方位づけ体系とは不整合な, むしろ競合する体系をなしているように思われる。ここでは, 「内」は, 価値あるものの方位ではない。「世間知らず」, 「狭量」, 「我がまま」, 「お山の大将」, 「馴れ」, 「価値の無自覚・忘失」, 「束縛」, 「内面の驕慢」といった, 消極的な, 非価値的なものの方位である。

このようなことは, 他の空間化メタファー, 方位づけメタファーにおいても見られる現象であろう。これは, 一つの文化内で概念枠が混乱し, 矛盾していることを示すのだろうか? おそらく, そうではない。一つの文化内での一つの概念枠によって生きるとき, われわれは, ほとんどその枠組みに支配され束縛されて, 思考し, 行動する。その意味では, 概念枠, 概念体系は, われわれにと

って決定的ともいえる〈力〉を有することになる。しかしわれわれは、そういう概念枠に完全に縛られきってしまうことはない。概念枠がもともとメタファーとして出発したものであるかぎり、われわれは再びメタファーによってその概念体系を活性化し、蘇生させることができるのだ。硬直化した絶対的權威によってわれわれの思考と行動を縛る概念体系は、それに見え矛盾する概念メタファーによって、新たに挑戦を受けることになる。同一文化内での、競合する概念枠・概念体系の共存という現象は、一つの体系の独裁に対する他の体系からの挑戦・警告の事実を反映するもの、と理解できる。それが、われわれ人間が小さな知恵を持つことの、一つの証でもある。

まさしく、われわれはメタファーによって生き、メタファーに縛られ、そして再びメタファーによって蘇生する。

註

- (1) 例えば, Davies [1982-83] p.67ff. 参照。
- (2) 本論で隠喩(メタファー)と言う場合, 直喩(シミリ)とは区別するが, 換喩(メトニミー)や提喩(シネクグキ)とはしいて区別せず, それらも含めて隠喩と呼ぶことにする。
- (3) 佐藤 [1978] p.50。
- (4) Johnson [1981] p.20ff. 参照。Johnson による, この論集の introduction は有益である。
- (5) Johnson op.cit.p.21, また安井 [1978] p.75ff. 参照。
- (6) Johnson op.cit.p.21。
- (7) Loewenberg [1975] p.161。ページ付けは Johnson [1981] 所収のテキストによる。
- (8) Beardsley [1962] 参照, とくにIII以下。
- (9) 佐藤 op.cit.p.80, 83。
- (10) 佐藤 op.cit.p.93。
- (11) リクール [1984] 参照。
- (12) 虚偽とメタファーとの関連については, のちに改めて考察する。(5節参照。)
- (13) Aristotle : Poetica 1459a 参照。
- (14) Black [1954-55]。この論文は Johnson [1981] および Black [1962] に所収。
- (15) リクール op.cit.p.183。
- (16) Black [1954-55] p.31。ページ付けは Black [1962] 所収のテキストによる。以下同様。
- (17) Black [1954-55] p.32。
- (18) Black op.cit.p.32-33。
- (19) cf. リクール op.cit.p.40。
- (20) 佐藤 op.cit.p.83 など参照。
- (21) 佐藤 op.cit.p.107。
- (22) Searle [1979] p.103。ページ付けは Ortony [1979] 所収のテキストによる。

- (23) 先駆的な「相互作用説」はすでに Richards [1936] 5, 6 章にある。Black の説はこれを洗練・発展させたものである。
- (24) Black [1954-1955] p.40.
- (25) Black op.cit.p.41.
- (26) Black op.cit.p.39.
- (27) Black op.cit.p.41.
- (28) この逆方向の編成替えを Black は認めていないようである (Black op.cit.p.42ff.) が、それでは、相互作用のはたらきが不徹底なままで終わることになる。安定した常識の体系、硬直化した常套句の体系を一度根底からゆるがし、解体することによって、「字義通りの意味」と「隠喩的意味」の区別、常識と非常識の区別を一旦御破算にし、相対化する。それによってメタファーが創造の〈力〉を得る。このはたらきを担うのが相互作用であったはずだ。Black の「説」はその点で、なお不徹底なものに終わっているという批判を免れないだろう。
- (29) Davidson [1978] 参照。
- (30) Frege [1892] 参照。
- (31) Davidson op.cit.p.200。ページ付けは Johnson [1981] 所収のテキストによる。
- (32) Black [1960] 参照。ページ付けは Black [1962] 所収のテキストによる。以下同様。
- (33) Black [1960] p.200.
- (34) Black op.cit.p.222.
- (35) Black op.cit.p.223.
- (36) Black op.cit.p.226.
- (37) メタファーをメタファーで受けて、語から文へと発展・展開させたものを、レトリックでは諷喩＝アレゴリー (allegory) と呼びメタファーと区別するが (佐藤 [1981] p.166ff. 参照)、ここでは区別せずを用いる。
- (38) Black op.cit.p.241.
- (39) Black op.cit.p.241.
- (40) Lakoff & Johnson [1980a] および [1980b] 参照。
- (41) Lakoff & Johnson [1980a] p.460 ff. 参照。
- (42) Lakoff & Johnson op.cit.p.464.

引用文献

- Aristotle : *De Arte Poetica*. O. C. T. (ed.) R. Kassel, Oxford University Press (1965).
- Beardsley, Monroe: "The Metaphorical Twist". *Philosophy and Phenomenological Research* 22, no. 3 (1962) pp.293-307.
- Black, Max : "Metaphor". *Proceedings of the Aristotelian Society* 55 (1954-55) pp.273-294.
- : "Models and Archetypes", in *Both Human and Humane*, (ed.) C. E. Boewe, University of Pennsylvania Press (1960), and in Black [1962] pp.219-243.
- : *Models and Metaphors*. Cornell University Press (1962).
- Davidson, Donald : "What Metaphors Mean". *Critical Inquiry* 5, no. 1 (1978) pp. 31-47.
- Davies, Martin : "Idiom and Metaphor". *Proceedings of the Aristotelian Society* 83 (1982-83) pp.67-85.

- Frege, Gottlob : "Über Sinn und Bedeutung". *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik* 100 (1892) pp. 25-50.
- Johnson, Mark (ed.) : *Philosophical Perspectives on Metaphor*. University of Minnesota Press (1981).
- Lakoff & Johnson : "Conceptual Metaphor in Everyday Language". *The Journal of Philosophy* 77, no.8 (1980a) pp. 453-486.
- : *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. (1980b).
- Loewenberg, Ina : "Identifying Metaphors". *Foundations of Language* 12 (1975) pp.315-338.
- Ortony, Andrew (ed.) : *Metaphor and Thought*. Cambridge University Press (1979).
- Richards, Ivor A. : *Philosophy of Rhetoric*. Oxford University Press (1936).
- リクール, ポール : 『生きた隠喩』久米 博訳. 岩波書店 (1984).
- 佐藤信夫 : 『レトリック感覚』. 講談社 (1978).
- : 『レトリック認識』. 講談社 (1981).
- Searle, John R. : "Metaphor", in *Expression and Meaning*. Cambridge University Press (1979) pp.76-116, and in Ortony [1979] pp.92-123.
- 安井 稔 : 『言外の意味』. 研究社出版 (1978).

[付記] 本論は, 鳥取大学教養部教官有志による勉強会 : Artes Liberales Tottori の第二回例会 (1984年12月1-2日, 鳥取県東伯郡関金町 国民宿舎せきがね荘) での研究発表の草稿をもとに, 書き改めたものである。発表の機会を与えていただいたことを, ここに記して感謝申しあげる。